

又 信



第102号

ゆう しん かい 会 報
又 信 会 報
令和4年12月発行



[香川大学法学部]

高松高等商業学校
高松経済専門学校

香川大学 経済学部
香川大学 法学部
香川大学 商業短期大学部

特別寄稿

ボランティアの思い出



又信会会長

対馬 健三

(経20)

又信会会員の皆様、こんにちは。皆様方におかれましては、コロナ禍にもかかわらず、益々ご健勝のことと拝察申し上げます。

日頃は又信会の運営にご理解とご協力を賜り有難く厚く御礼申し上げます。

香川大学では来年、経済学部創立100周年を迎えます。ニュース又信にも書かせて頂きましたが100周年記念行事等にご協力を何卒宜しくお願い申し上げます。

2020年2月より新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、2021年7月、1年間延期された東京オリンピックは無観客開催となり、2022年2月にはロシアによるウクライナ侵攻が突然始まり、7月に安倍前総理大臣が銃撃

され、その後、オリンピック汚職事件やら統一教会献金問題が騒がれ、更には急激な物価上昇など、世の中が不穏な状態が続いています。

何はともあれ1日でも早く平和で安心して暮らせる時代になって欲しいものです。

さて、今回は私の経験したボランティアでの思い出を書かせていただきます。

阪神淡路大震災

平成7年(1995年)1月17日マグネチュード7.3の阪神淡路大震災が発生し、被災地の惨状が連日テレビや新聞で報道されると全国から救済物資や募金が届けられ、私も募金に協力したものの「これでいいのか」と、何か物足らなさを感じていました。

そんな中、翌2月に東京での全国経営ゼミに参加した折の話です。洋服のAOKIの青木社長(オリンピックのスポンサー契約で話題になっていますが)の講演がありました。

青木社長の実家は戦前に米屋を営み、戦後は質屋を開業したそうです。青木社長が高校3年の時に会社が倒産した為、大学進学を断念し、借金返済の為に質流れ品の行商を8年間続けたとのことでした。そして会社の経営にとって一番大切な事は「経営理念」であるとの講演でした。しかしながら私が感激したのは、講演が終わって講師にお礼の拍手をした後で、司会の人

が「講演の時に青木社長は話しませんでした、このたびの大震災に際して会社として何が貢献できるかを、神戸へ3人の社員を派遣して調査した結果、当時は寒い時期だったので65歳以上の高齢者に6,000着のコートを配ったそうです。そしてコートを配り終えた時に社員達は何と、自分達が着ていたコートを自ら脱いで被災者に渡したそうです。

何と素晴らしい社員達！そしてそんな社員を育てた青木社長に感動して、私もボランティアに行こうと決心しました。

讃岐うどんの炊き出し

香川から行くので、うどんの炊き出しをすることとし、準備にとりかかりました。テント、机、いすなどは会社にあるので、大きな鍋やコンロは知人の給食会社が、容器や箸などは別の食品会社が無償で提供してくれ、うどんのダシを買いに行ったらうどん屋では「神戸へ行くのならお金はいらん！」とタダにしてくれるなど、多くの人の善意があり、高速道路は震災支援ということで行政が無料通行証を発行してくれたので助かりました。

讃岐うどん600食を用意して慣れないトラックを運転して、神戸では泊まる場所が無いので姫路で前泊して、翌朝早く一番被害が大きいと聞いていた長田地区へ向かいました。

長田地区は木造家屋が多かった為、一面焼け野原で黒く焦げた地面のあちこちに亡くなった人のために花が供えられていて悲惨な状況でした。避難所の受付になっていた長田小学校の体育館に着いてびっくりしたのは、受付のテントで髪が茶髪で耳だけでなく鼻にもピアスをした、どこから見ても不良少年っぽい5、6人の若者達がテキパキと荷物の片付けや掃除をしていて、私達に対して実に礼儀正しく、大きな声で「おはようございます」・「ご苦勞様です」などと挨拶してくれたのです。彼らは普段、学校では成績だけで判断されて劣等生の扱いだったのに震災の避難所では周りの大人から頼りにされ感謝されて、自分の存在感に目覚めて、生き生きと輝いて見えました。校庭にテントを張っての、うどんの炊き出しは特にお年寄りに好評でした。避難所で配られるお弁当のご飯は冷たくて固いけど、うどんは暖かくて美味しいと言って喜んでくれました。



こんぴらさん（金刀比羅宮）へ代参

校庭のテントでのうどんの炊き出しが終わり体育館の中の避難所へ行くと火のついたせんねん灸をお盆の上に乗せて巡回している東京からボランティアに來たという中年の女性に出会い、その人が言うには『ボランティアとは、大げさに考えずに、自分に出来る事を何でもいい、とにかく現地に行って何か手伝う：お年寄りの肩を揉んであげるとか、話を聞いてあげるだけでもいいと思う』と、話してくれました。その人がせんねん灸を分けてくれたので、それを持って巡回した時、被災者の中に年離れた女性に出会い、「おばあちゃん、このたびは大変でしたね。さぞ辛かったでしょう。」と声をかけたら、意外な返事が返ってきました。「私は今まで身寄りも無く、一人ぼっちで毎日空きカン拾いをして生活してきました。今は、みんなが声をかけてくれるし、食べる物もくれるので、今の方がずっと幸せです。」と。どこから来てくれたのかと聞かれたので、四国の香川県高松市からと答えると、「私は高知の漁師の生まれで、高知に住んでいた頃は海の神様のこんぴらさんに毎年参拝に行ってたけど、神戸に来てからは一度も行っていないので、神戸のみんなが良くなるよう代わりにお参りしてくれんか」と財布の中から大事そうに百円玉を差し出してくれたのです。琴平は昔、森の石松が親分の清水次郎長の

刀を奉納した事やこんぴら参りと記した袋（中に木札や初穂料）を首にかけた犬が飼い主に代わって代参することでお有名ですが、後日渡された百円玉を持って金刀比羅宮へ代参しました。すると、その話を知ったこんぴらさんが後日、粹な計らいをしてくれたのです。神戸のおばあちゃんの元に『お守り』が送られて來たのです!!

たった2日間のボランティアでしたが、様々な出来事が感動深い貴重な体験でした。



創立100周年

を前にして



経済学部長

長山 貴之

来たる2023（令和5）年12月に香川大学経済学部は創立100周年を迎えます。今を去ること99年前の1923（大正12）年12月に、内地で12番目、四国で初の官立高等商業学校として高松高等商業学校が設立されました。高等商業学校の修業年限は3年でした。ただし、東京高等商業学校と神戸高等商業学校は例外的に4年（予科1年及び本科3年）でした。「内地で12番目」と書きましたが、外地を含めると14番目でした。設立順に全校を列举します。

- 1887（明治20）年…東京高等商業学校↓
- 1920（大正9）年…東京商科大学
- 1902（明治35）年…神戸高等商業学校↓
- 1929（昭和4）年…神戸商業大学

1905（明治38）年…山口高等商業学校、長崎高等商業学校

1910（明治43）年…小樽高等商業学校

1919（大正8）年…台北高等商業学校

1920（大正9）年…名古屋高等商業学校

1921（大正10）年…福島高等商業学校、大分高等商業学校

1922（大正11）年…彦根高等商業学校、和歌山高等商業学校、

京城高等商業学校

1923（大正12）年…横浜高等商業学校、

高松高等商業学校

1924（大正13）年…高岡高等商業学校

こうして見ると、1919（大正8）年から1924（大正13）年にかけて、高等商業学校の設立が相次いだことが分かります。高松高等商業学校は、松平頼寿伯の並々ならぬご尽力もあり、この列に加わることができました。なお、同じ時期には、高等学校も相次いで設立されています。

『明治大正国勢総覧』の「内地」大正十二年

度末現在官公私立別校数教員数及生徒数表」によると、内地の高等学校は官立23校、私立2校に過ぎません。私立2校は武蔵高等学校と甲南高等学校ですから、大都市にありました。1919（大正8）年に松山高等学校が設立されるまで、四国には高等学校がありませんでした。1922（大正11）年には内地で23番目の官立高等学校として高知高等学校が設立されました。ちなみに、高等学校は大部分が3年制で、中学校（5年制）と高等学校（3年制）の一貫校である7年制高等学校は官立1校、私立2校だけでした。官立1校は東京高等学校です。

高等学校の不足を補っていたのは、専門学校と実業専門学校でした。専門学校は私立が主力でしたが、実業専門学校は官立が主力でした。1923（大正12）年度末時点で、内地の専門学校78校のうち私立は69校、官立は5校、公立は4校でしたが、実業専門学校43校のうち官立は35校、私立は6校、公立は2校でした。官立の実業専門学校の内訳は、工業系17校、農業系8校、商業系9校、商船系1校でした。いわゆる文系は商業系9校だけでした。この9校に1923（大正12）年設立、翌年度開学の横浜高等商業学校と高松高等商業学校が加わりました。東京高等商業学校は既に東京商科大学に昇格しています。

瀬戸内地方では、高等教育機関の誘致競争において大変な激戦が繰り広げられました。兵庫

921（大正10）年に高知県が2万坪の土地を

のうち官立は3、402人、実業専門学校のう

す。



最近想うこと

(2022年秋)



法学部長

三野 靖

本稿を書いている時期(2022年10月末)は、コロナ禍の第7波も収まり、旅行や出張等の移動制限もなくなっています。私も、10月以降、各種学会や会議等、出張が多くなっています。又信会も大阪支部の総会が10月8日(土)に開催されましたが、あいにく出張と重なり、出席することができませんでした。マスク着用や会食等、社会生活上のさまざまな行動制限や自粛要請も緩和されています。では、私たちの日常生活や社会活動は、コロナ前に戻ったのでしょうか。やはり、何か違うような気がします。まず、ビジネス等の公的な活動の面からはどうでしょうか。

コロナ禍まったただなかは、慣れないオンライン会議や授業は、物珍しさもあり、また使うソフトもSkype、Zoom、Teams等、主催者によりあれこれで、とにかく慣れるしか

ない状況でした。また、通信環境により、なかなかオンラインに入れなかったり、途中で切れたり、私も何度も冷や汗をかいたことがあります。一方で、従来、会議は参加者が一か所に集まってするもの、予定が合わない場合は欠席というものが、当たり前でしたが、移動が難しい「場所的予定不調」の場合は、当該会議の間帯が空いている限り、ネット環境があればオンラインでどこからでも参加可能になりました。「場所的ディスタンス」による距離感がなくなり、その場所に行けないことが参加できない理由としては、言い訳が効かなくなりました。ただ、パソコン上は参加している「パソコンだけ参加」もできますので、名ばかりオンライン参加状態があるのも、正直なところだと思います。皆さんも思い当たるふしがないでしょうか(筆者も)。

他方で、ちょっと不思議な光景も現れました。参加者は対面で参加することが可能な場所(例えば、同じ大学構内)にいるのに、それぞれの場所からオンラインで参加しているなんてことも、今や普通の光景になっています。当大学の大学幹部等が参加する会議は、主要幹部のみ会議室に集まり、他の者はオンラインで参加するのが通例になっています。従来ですと、月1回は、大学幹部が対面で一堂に会する機会がありました。が、「疑似会っている」状態です。で、いまひとつ会って話した実感がありません。授業でも教員は教室で講義をしているのに、教

室のキャパシティの関係で、学生は隣の部屋でパソコンを相手にオンラインで受講しているなんて光景も普通にあります。「集まる(集う)」(多くのものが一つ所に寄りあう。(広辞苑第6版))という概念は、もはや一定の場所を前提としたものでなくなりつつあることを実感します。

次に、プライベートな面ではどうでしょうか。仲間や家族等の食事会・飲み会は、コロナ禍当初は、何か悪いもの(コロナの原因)かのように、自粛・バッシングの嵐でした。今はどうでしょうか。これは、個々人の感覚や行動の違いが今も影響しているように思います。私個人も、外での夜の会食、まして居酒屋での飲み会は、ほぼ皆無な状況です。大勢がワイワイ言っている場での参加は躊躇しますので、やむをえず参加しても早々に切り上げています。なお、コロナ禍で一時ブームになったオンライン飲み会は、もはや話題にもなりませんね。

社会全体も大きく変わったのは、冠婚葬祭、特に葬儀のあり方でしょう。私事ですが、父が2020年5月に他界しましたが、まさにコロナの始まりの時期でした。父は、かつて社会的な立場にありましたので、かえって簡素に、また生前葬もしていましたので、大きな葬儀をするつもりもありませんでしたが、家族・親族くらいは集まって送ろうとは思っていました。が、突如のコロナで、それもままならぬ形で送らざ

るをえませんでした。しかし、このようにコロナ禍の葬儀のあり方は、父のケースのみならず、社会全体としても大きく変わったようです。社会的地位のある人でも家族葬が多くなったように思われますし、葬儀場もそれに対応しているようです。ただ、人の死にどう向き合うか、どう考えるかは、本人はもとより、家族や縁のある人にとってもそれぞれですので、コロナだから人が集まっただけの会葬はダメ、という認識は少しあらためる必要があるかもしれません。一方で、コロナへの認識は、家族や近親者であつても人それぞれですので、とても難しい問題です。

結婚式はどうでしょうか。これも私事ですが、長男夫妻の結婚式は、コロナの兆候が少し出始めた時期に予定していましたが、延期の末、家族と限られた親族のみで実施しました。本人たちにとっては、つらい判断だったと思います。

もちろん、身近なものだけでお祝いするのも悪くはありませんでした。これまで出席した結婚式でも、特に親御さんは、多くの来客への対応に追われて、じっくりと想いにひたる間もなく、あれよあれよという間に終わってしまう光景は複雑な思いをもって見ていましたので。ただ、若い2人にとっては、友人やお世話になった人にお礼とともに祝福を受けて門出を迎えたいはずでしょう。結婚式に限らず、入学式、卒業式、入社式等、若い人たちの門出は、コロナで制限されるべきではない（なかった）と思います。

さて、コロナが今後どうなるかはわかりませんが、もはや、コロナ禍当初の（今から思えば）過剰ともいえる国や自治体、企業や学校等の社会の認識・対応は、冷静に検証されるべきでしょう。そのうえで、もっとも難しい問題は、コロナそのものだけでなく、さまざまな事象に対する私たち一人ひとりの認識、そして何より社会的な合意形成をどう図るかでしょう。なかでも、もっとも身近な事象としては、マスクの着用の有無でしょう。コロナ禍以前は、咳エチケットや風邪・インフルエンザ予防としてのマスク着用や顔を隠したいとき（人）のマスク着用等はありませんでしたが、今のように「一億総マスク状態」は、想定もしていませんでした。考えてみれば、奇妙なことで、同調圧力の強い日本社会ならではの現象でしょう。屋外でもマスクを外していると何となく白い目で見られているような気がしますし、私自身も屋内でマスクをしていない人を見ると、いい気持ちがありません。皆さんはいかがでしょう。

合意形成というと、何か大きな社会的課題について、語られることが多いですが、例えばダムや道路等の公共事業の実施や産業廃棄物施設等の忌避施設の設置等。コロナ禍全体は社会的課題ではありますが、マスク着用という極めて個別事象についてまで、社会的課題として問題になり、しかも合意形成がとても難しい課題であるとは、思いもよらなかったのではないでし

ょうか。また、大きな社会的課題を巡る合意形成のための場では、どうしてもいかにも「大所高所」から客観的に物事をみていますよ（所詮、他人事？）といわんばかりの「したり顔」の人がでてきますが（私のような学者に多い？）、マスク着用という一個人・当事者として誰も逃れようのない課題については、そうはいかないでしょう。皆さんも家庭や職場・学校、さまざまなコミュニティで話し合ってみてはいかがでしょうか。



【特集】

「TERASU」のご紹介

(経済学部学生チャレンジプロジェクト事業)

プロジェクト事業)

経済3年 和田 葉奈加

経済3年 田 井 涼 子

経済3年 秋 山 ひとみ



私たちTERASUは、香川大学経済学部の学生チャレンジプロジェクトに採択され、2016年から活動を行っています。現在3年生8人、2年生12人、1

年生13人の総勢33人の学生が在籍しています。「TERASU」という名前には、「讃岐提灯を照らす」、「香川の魅力を照らす」という2つの意味があります。「香川県の伝統工芸品である

讃岐提灯を多くの人に知ってもらうために、私たちが灯りをもとして広めていきたい」という想いと、私たちが香川の魅力を讃岐提灯で照らして知ってもらいたい」という思いが込められています。

TERASUでは、様々なイベントでワークショップや展示などを行ったり、SNSで情報を発信したりしています。大学生らしい自由な発想で伝統を残しながら讃岐提灯の新たな可能性を開拓し、より多くの人に魅力を知ってもらえるよう日々活動しています。今回は初めて又信会の会報に寄稿させていただける機会をいただけたのを有難く思っています。少しでも多くの方にTERASUの活動や讃岐提灯について知っていただけると幸いです。

続いて讃岐提灯について紹介させていただこうと思います。皆様は讃岐提灯をご存じでしょうか。讃岐提灯は香川県の伝統工芸品です。弘法大師が中国からその技法を伝承し、約1000年以上の歴史を持つ、日本最古の提灯と言われています。現在では、三好提灯店が一子相伝で伝統の技を継承しています。主に活動に使用しているのは、讃岐提灯の中でも「折提灯」という種類の提灯です。折提灯は、四国八十八ヶ所の遍路道を巡るお遍路さんが考案したといわれています。お遍路さんが最初に作った折提灯は和紙の部分に手ぬぐいを使用していたといわ

れています。折り提灯は、簡単に作成できたり、様々なデザインを施すことが出来るため、気軽に讃岐提灯の魅力を感じることが出来ます。

TERASUの主な活動内容は、ワークショップや展示です。ワークショップでは、「もつと手軽に楽しみながら讃岐提灯にふれてもらいたい」という思いで、世界で一つだけのオリジナル提灯づくりを楽しむことができます。展示では、メンバーが一つ一つ心を込めて作った提灯や地域の小中学校でワークショップを行い作成された提灯を展示しています。地域と深く関わり合いながら、讃岐提灯の最大の魅力である灯りを眺め、のんびり過ごしてもらえる空間づくりを目指して活動を行っています。今年は、念願だったちようちんカフェを4年ぶりに再開することができました。ちようちんカフェは、高松市と香川大学が連携して屋島観光の再生を



目標に2016年から行っているイベントです。今年は、「出逢いをてらす」というコンセプトのもと、屋島の夕夜景や讃岐提灯の魅力と来てくれた方々との出逢いをてらすとともに、訪れた人の心に灯りを灯し、笑顔になっていただけるようなちょうちんカフェを目指して準備に励んできました。4日間で総計1,294人のお客様にお越しいただき、多くの方との出逢いをてらすことができました。



今後も讃岐提灯の魅力がもっと広まるように活動を続けていきたいです。年を重ねるごとに段々TERASUや讃岐提灯のことを知っていただけるようになり、依頼していただくことも多くなりました。しかし、これまでの活動やアンケートなどたくさんの方と話す機会を通して、讃岐提灯について知っている人は香川県民も含

め、そう多くはないように感じています。一つ一つのイベントを大切に、新しい試みや工夫を凝らした提灯の開発などを行っていききたいです。TERASUのモットー「讃岐提灯で香川の魅

力を照らす」ことができるように、まずは香川県内から、そして全国へ香川県の伝統工芸品「讃岐提灯」の魅力を広めていきたいです。



あの人

「思った以上に人が来てくれ、うれしかった」と喜ぶ秋山さん

この人

香川大学の学生プロジェクト「TERASU」のメンバーで経済学部3年の秋山ひとみさん(21)＝高松市屋島中町＝。屋島山上で先月、3年ぶりに「屋島山上ちょうちんカフェ」を開催し、「思った以上に人が来てくれ、本当にうれしかった」と盛況を喜んでいる。

高校生の時、友人と一緒に関カフェを訪ね、讃岐提灯と屋島の夜景とのコラボレーションに魅了された。地元・屋島を盛り上げる学生たちの姿を見て、「自分も運営に携わりたい」と同大への進学を決意。入学後は迷わず同プロジェクトに参加した。

3年ぶり 屋島を照らす

新型コロナウイルスの影響で過去2年間は中止。運営のノウハウを知るメンバーはおらず、手探り状態で6月から準備を始め、当日までに約300個の讃岐提灯を用意した。「飲食班リーダー」としてメニューも考えなければならず、大変だった」と苦笑いする。

同カフェは3年生が主として運営するため、来年はサポート役に徹する予定。「来場者からの『おいしかった』の言葉に達成感ややりがいを感じた」。会場を彩った色とりどりの讃岐提灯のように、これからも若者の感性で生まれ育った地元を「照らす」覚悟だ。

令和4年9月21日付 四国新聞記事

【又信会事務局 注釈】

経済学部学生チャレンジプロジェクト事業のご説明

1. 学生チャレンジプロジェクト事業とは

香川大学が実施している「香大生の夢 チャレンジプロジェクト」の一環として、経済学部が実施しているもので、「経済や経営に関する専門知識を活かして国内外で活躍できる人材を育成する」という経済学部の教育目標実現のための一手立てとして、学生の自主的なすぐれた取組を支援し、学生の自主性・積極性・創造性を引き出すことを目的としています。

本プロジェクトでは、地域活性化に特化せず、学業の振興や大学内の活性化など幅広く、学生による優れた自主的な活動を支援します。

なお、授業やサークル活動の一環と判断されるものや、大学祭企画事業などは対象外です。

(注) 詳しくは、香川大学および経済学部のホームページをご覧ください。

2. 応募資格

香川大学経済学部 に在学する学部学生
および大学院生等複数名による団体。メンバーに他学部学生の参加可。

3. 本年度のプロジェクト

経済学部による選考の結果、以下の16事業が「本年度のプロジェクト」として採択され、現在活動中です。なお（）内は応募時のメンバー数です。

- ① 私だけの坂出を撮りミング
(メンバー23名)
- ② ここちからパワーで男木島を元気に！
～名産品落花生づくり～ (19名)
- ③ 讃岐提灯で香川の魅力を照らす
プロジェクト (TERASU) (30名)
- ④ 地元再発見の旅プロジェクト
またたび (17名)
- ⑤ 海ごみ拾いツアー
～僕たちは香川の海ごみ海賊団！～
(28名)
- ⑥ 竹あかりでまちとつながりを照らす
プロジェクト (14名)
- ⑦ 北浜工房で芸術を体験 (20名)
- ⑧ 高松盆栽の魅力再発見！
～女子目線で効果的なPR～ (27名)
- ⑨ 綾川町における
多文化共生のまちづくり (7名)
- ⑩ ちょんまいガーデンから持続可能な
暮らしを考えるプロジェクト (25名)
- ⑪ カマタマーレ讃岐との共同イベント
(7名)
- ⑫ 瀬戸内の島々で体験型アート木に
刻まれた芸術、菓子木型の魅力を
体感！ (29名)
- ⑬ 清掃活動で島一周！
小豆島八十八ヶ所編 (坂手港周辺)
(53名)
- ⑭ 仏生山まるごと動物園
～こどもたちと作る地域芸術祭～
(20名)
- ⑮ 災害から直島を守れ！
～いま私たちにできること～ (56名)
- ⑯ 地域と学生をつなぐ場 なえどこ
(7名)